慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	内藤, 正人(Naito, Masato)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2019
Jtitle	Booklet Vol.27, (2019.) ,p.5- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000027-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

内藤　正人

20年前、「アーカイヴ」という言葉はまだごく一部で使用されていたにすぎなかった。とりわけ芸術分野においてのアーカイヴの重要性は、まったくと言ってよいほど考慮されていなかったように思う。慶應義塾大学アート・センターでは、1998年に舞踏家・土方巽の資料寄託受けたのを皮切りにアート・アーカイヴを開設し、現在では寄贈・寄託や預託を含め、13ものコレクションを擁している。それら資料の受け入れや整理、公開にとどまることなく、毎年かならずアーカイヴ資料をもとに展覧会という形で研究成果等を発信してきた。さらにアーカイヴそのものを研究対象とし、大学における芸術研究アーカイヴであることを標榜（ひょうぼう）している。しかしながらこの20年で状況は著しく変化していると同時に、そもそも芸術領域のアーカイヴとは何であるのか、という基本原則を見失う状況に陥ってはいないだろうか。そう自らを省みる時期でもあるのではないだろうか。

そこで今号の特集では、テーマを「芸術とアーカイヴ」とした。アート・センター設立25周年を迎え、また、アーカイヴ創設から20年が経った2018年度に、周年事業としてアート・センターが行なった一連のシンポジウムや研究フォーラムにご登壇くださった方々に、多角的な側面からアーカイヴについて論じていただいた。また、個別に論考を寄せてくださった方々とは別に、シンポジウムに映像登壇していただいた御厨貴氏の録画映像書き起こしの文章も掲載した。御厨氏が実践されてきたオーラル・ヒストリーは、日本政治史の重要な証言記録となっている。一見芸術の範疇からは外れると思われるかもしれないが、このオーラル・ヒストリーは出版され、文化の一翼を担っているのである。今日では日本の戦後美術史においても、オーラル・ヒストリーがアーカイヴと密接にかかわることを考えるならば、御厨氏が政治史において行ったオーラル・ヒストリーからわれわれも学ぶべきことが多いだろう。

柳田利夫氏は歴史学研究の立場から、長年にわたり国内外の歴史アーカイヴの資料を基盤に研究を続け、またこの20年来はアーカイヴを構築、あるいは運営する側にあって、その実践を元にアーカイヴの創造性について考察している。アーカイヴは公共に開かれるものであると同時に、個人の生にも交錯するという、まさに現場での体験を踏まえて鋭く指摘する。

佐藤知久氏ほか京都市立芸術大学芸術資源研究センターの方々は、現代美術

の作品、とりわけ一過性の上演作品であるダムタイプの《pH》のアーカイヴを「再演・創造のためにつくる」ことを視野に入れた試みについて、具体的なプロセスを含め考察している。アーカイヴを構築する活動そのものが創造であり、多くの関係者との協働が次なる豊かな思考を促すことをわれわれに示唆している。

樋口良澄氏は、明治大学で開設に向けた準備が進行している唐十郎アーカイヴについての論考を寄せてくださった。唐十郎の演劇作品はもとより、その思想や実生活そのものを捉え、資料を重層的に次世代に活かしていく取り組みは作品をめぐる新たなコンテクストの発見につながると指摘している。「ダムタイプ」と「唐十郎」といういずれも一回性と不可分である上演芸術において、いかにアーカイヴを構築していくかという大きな命題に対する果敢な取り組みであり、両機関の今後の展開にいっそう注目していかなければならない。

山川道子氏はアニメの企画・制作を手掛けるプロダクションにおいて、どのようにアーカイヴが構築・運営されているのか、その実態に基づいて、アーカイヴを存立させるための支持基盤をめぐり「パトロネージ」をキーワードにして論じている。瞬間的な資金調達でアーカイヴが設置されたものの、その後資金不足によって消失する事例が多いという指摘には、アーカイヴに関わる誰もが危機意識を共有できるはずだ。

久保仁志氏は現在アート・センターのアーカイヴでアーキヴィストとして日々多くの資料に携わっている。ここでは、クリストファー・ノーランの映画作品《フォロウィング》の分析から、アーカイヴが持たされている要素のひとつ「編集」行為に焦点をあてた考察を試みている。

元アート・センター所長の前田富士男氏は歴史学に立ち返り、アーカイヴの本質的な意義を明示している。アーカイヴの原則を、歴史学者ドロイゼンや哲学者ドゥルーズにも言及しながら、現在のアート・アーカイヴをめぐる言説やアーカイヴ構築の理念に対し批判的な視座を含めつつ論じている。研究アーカイヴのあり方が、広く人間の知の蓄積と継承に資するものならば、われわれは真摯にその課題と向き合い、いっそう誠実に仕事をしなければならないだろう。

歴史はさまざまな出来事の連なりによって構築されてゆく。出来事には人の営為とそれにまつわるモノが集積しており、アーカイヴはそれらと向き合う作業から始まる。整理・分類・保存・収集・公開・発信の持続的な推進と並行して、アーカイヴをいかに構築し運営してゆくかをわれわれは追究していかなければならない。人工知能やIoTの進展に伴い劇的な変化が起こりつつある現在、多様な観点から考察された論考を通じて「アーカイヴとは何か」を再考し、繰り返し問うていくことになるだろう。

最後に、ご執筆いただいた寄稿者の方々に心より感謝を表するとともに、本書が芸術とアーカイヴに関わるすべての方々に対して、何がしかの貢献をするならば幸いである。

（ないとう　まさと・所長、慶應義塾大学文学部教授／
美術史・江戸時代絵画・版画史）